

めぐりあい

一

江戸えどの馬喰町ばくろうちょうに浪花屋なにわやという両替屋りようがえやがありました。小さいお金がなくなつたとき、大きなお金をもつてつて、手数料を出して、くずしてもらつたりする店なのです。その店の銭箱ぜにの中に、四文銭もんせんの、仲のいい兄弟がいました。

八月のある午後のことです。店へ、旅商人たびあきんどらしい人が両替りようがえに来ました。

「いらつしやいますし。どうも、ひどくむしむしいたしますね。はは、かしこまりました。」と主人は銭箱ぜにのふたをあけてお金をつかみ出しました。

「あつ弟がいつちまつた。おやおや、これから、どこをどうまわることか。かわいそう

に。」

と、四文銭もんせんはため息をつきました。

お客が帰ると、七つになるお千代ちゃんという女の子がおくから出て来ました。

「ね、お父さん。二階の風りんふうりんのべろが取れたから、おあしを一つちようだい。べろのかわりにつけるの。」と言いました。主人はたばこくさい太い指で四文銭もんせんをより出してわたしました。

「へえ、風りんふうりんへつけられるのか。こいつはしめた。第一すずしくっていいや。」と四文銭もんせんはにこにこ、よろこびました。女の子は中の間まのはしご段をとんとん上がっていきました。

「兄ちゃん、おあしをあらって来たわ。」

「どれ。」と九つになる長ちゃんちやうちゃんがのぞきこみました。

「ああ、四文銭もんせんか。それ、おれにくれよ。銭ぜにごまにするから。」

「いやよ。風ふうりんにつけるのよ。」

「ばかだな。よこせつてば。」と、長ちやうちゃんは、お千代ちよちゃんの手をはたきました。すると四文銭もんせんはぼんとはねとんで、れんじまどから下の細ろじへ、ちゃりんと落ちました。

「いやあん、どこへとばしたの。めっけてよめっけてよ。」とお千代ちよは泣き声なみこゑでどなりました。そのうちに、下のろじのおくから、あんまの家うちの、二十はたちになるばか息子むすこが出て来て

「ほ、四文銭もんせんが落ちてらあ。」と言って、拾い上げてたもとへ入れました。

「うわ、くさいたもとだな。すっぱいや。これはたまらん。おおくさい。」と四文銭もんせんは鼻をつまんでしまいました。と、しばらくしてから、急に外ががやがやさわがしくなり
ました。

「ええ、いらっしやいらっしやい、見料けんりょうはただの三文もん。これからいよいよ一の谷いちのやの合戦がっせん。熊谷くまがいと敦盛あつもりの組うちのはじまり。ええ、いらっしやい。じゃんじゃん、どんどん。」

れんじまど…木
や竹などをなら
べたまど

たもと…和服の
そでのふくろの
ようにたれた部
分

四文銭もんせんは、ちやりんとざるの中へほおりこまれました。すきまから見るとむしろ小屋ごやのさるしばいで、じゃんじゃんどんどんという鳴りなものにつれて、黒かわおどしのよろいを着、長い太刀たちをつるしたざるが、赤犬せなかの背中せなかに乗って板道いたみちを下りていきます。おしおしになっっている見物は、うわあつと笑いました。今度は、向こうの板道いたみちから、赤いよろいを着た敦盛あつもりの小ざるが、白犬に乗って出ていきました。じゃんじゃんどんどん、うわつはあと、たいへんなさわぎです。

二

ここは本所ほんじよのあるうら長屋ながやのろじです。両国りょうごくの見世物小屋みせものごやの前へ、夜おでんの屋台やたいを出す八兵衛べえじいさんの家では、かみさんが、せんたくだらいを買って来て、昼ねをして
いるじいさんをゆり起こしました。

「ね、ちよいと。このたらいの底へ、おあしで焼印やきいんをおしておくれよ。となりのおかみさんが、しよつちゆうまちがえて、家のたらいでよこれものをあらうからさ。あんな、

そそつかしい女つたらありやしなないよ。さ。」

じいさんは、起きてあくびをして、目をこすってから、火ばちへ火をおこすと、たなからよれよれのかなきんの財布さいふを下ろして、中から四文銭もんせんをより出しました。

「こいつがいいや、大きいから。」と言うなり火ばしではさんで、火の中へぐいとおしこみました。

「あつつつつ、ひどいことをするなあ。あつあつあつ、あつい。」と、四文銭もんせんは黒つこげになってうなり続けました。じいさんは、その銭ぜにを火ばしではさんで、かみさんがつき出した、たらいのうら底ぞこのまん中へ置き、上からぎゅうと火ばしでおしつけました。たらいは、

「あつつつつ、おうい四文銭もんせん、何をふざけるんだい。よせよ。あつあつ、あつつ。」と言つてけむりを上げました。

「わたしだって、体中じゅうちゅうを赤焼けあかやにされたんです。あんたよりか、どんなに熱かったか

しれやしない。これでも風りんのべろまでに出世しゅっせしようとしたわたしだのに。こう黒こがしにされちやもう人も見向きはしてくれない。罪つみもないものを、らんぼうな。」と、四文銭もんせんはなみだを流して言いました。

「さ、出来できたよ。」と八兵衛べえは、ひしゃくに水をくんで来て、じゅうと四文銭もんせんへぶっかけてから、火ばしでつまんで、板いたの間まへ下ろしました。そのとき外から、

「おばさん、こないだの歯みがき売りが来たわよ。」と、年わかい女の声がありました。

「あら、そう。こないだは買いそこねたから、今日はどうしても買わなくちや。この四文銭もんせんを使つてしまおう。」

すると、間もなく、しゃがれた男の声で、

「さあ、買ったたり買ったたり。これでみがけば歯の根もしまる。大ぶくろ、小ぶくろとくよう徳用ぶくろ。」と、どなり立てました。

「小さいぶくろのを一つおくんな。」と、八兵衛べえのかみさんが言いました。

「はい、ありがとうございます。」と、みがき屋は四文銭もんせんを受け取ると、ちよいと、うら返して見て、チャリンと、財布さいふへ落としました。

「ほ、きたねえやつがへえって来たぜ。」

「おまえ、まっくろこげじゃないかい。」と、ごちやごちやかさなっている一文銭もんせんどもがばかにしました。

「よしてくれ。これでも、おまいたちとはちがつて、もとは、ちゃんとした両替屋りようがえやの銭ぜにばこの中にいた男だ。それがこれこれこういうわけでおでん売りの、鼻の長いじじいに火で焼かれたんだよ。」と四文銭もんせんは、がっかりしたように、あぐらをかきました。

その晩、品川しながわのある木賃宿きちんやどで、みがき屋は財布さいふをあけて、今日の売上げ銭ぜにをかぞえました。

「ちよつ、こんな黒やけの四文銭もんせんをつかまされちゃった。うん、これは商売道具いなかに使つてやろう。あすからいよいよ田舎いなかまわりだ。」とおかねを財布さいふにしまいこみました。

「おやおや、田舎いなかへつれてかれて、どんなやつの手にわたされるんだらう。あああ、浪花屋なにわやの銭箱ぜにばこの中はよかったな。ああくさい。何てくさい小銭こぜにどもだらう。おいおい、おまいたちの体は、みんな卵たまごのくさったようなにおいがするぜ。」と四文銭もんせんは、一人ごとを言ったり、はたのものにあたりちらしたりしました。

三

あくる日から、はみがき屋とうかいどうすじは東海道筋の村々をかせいで歩きました。人が集まると、耳みみつたぶから、まつくろい四文銭もんせんをはずして、歯はみがきをつけた竹たけようじでゴシゴシこすって見せながら、

「ほうれ、どうです。このとおりだ。今の黒い銭ぜにだって、これでみがけばこのとおり、ぴかぴかのはだになるだらう。どうだ、まいったか。まいったら、一ふくろずつ買ってくれ。大ぶくろに小ぶくろこ。」と、しゃべり立てました。

四文銭もんせんは、なるほど、もとの私にかえったぞと、よろこびましたが、それもほんのち

よつとの間で、はみがき屋は、またすぐきせるのやにをなすりつけて、まっくろにしました。一日中、何度となく、こすって見せては、またやにをぬり、ぬってはまた、ごしごしこすりしました。

「あああ、いやになっちゃうね。早く、たちのいいやつの手に移りたいものだ。」と四文銭はあぶらあせを流して、ふうふういきをしました。

それからだんだん歩いて、いく日目に島田の宿へ来ますと、はみがき屋は、道ばたのあんころ屋へ入って、あんころをひと皿食べました。

「おい、いくらだい。」

「はいはい、四文いただきます。」

と、あんころ屋のばあさんが言いました。

「ほい、ここへおくぜ。」

はみがき屋は、財布のひもとくのがめんどろなので、耳にはさんでいた四文銭をお

いていきました。

おばあさんは、目をしわめて、その銭ぜにを見ると、ちよつと舌打ちしたをして、

「こりや、にせ金だよ。にくらしいやつ。」とあとをのぞいて見て、

「もう、あんなとこまでいきやがった。ちきしょう。」と言いなながら、名代なだいあんころと

かいた、置おきあんどんの油皿あぶらひらの中へ、べちやりとなげこみました。四文銭もんせんは、あんどん

のとうしんおさえにされたのでした。

「ぶう、くさい。油びたしはあきれたね。あああ。」と四文銭もんせんは泣くような声で言いま

した。ところが、夜になって、おばあさんがあんどんへあかりをつけて見ると、にせ銭がね

だと思つたままつくろの四文銭もんせんが、いつの間にか、きれいな銭ぜにになっています。油でやに

が流れてしまったのです。

「あらあら。」とおばあさんは、かんざしの足ですくい出して、紙でふいて、財布さいふへ入れました。

「へん、江戸えどの水道の水で洗い上げた身はだですぜ。一どや二ど、やにをなすられたつてしんから黒くはなりませんよ。」と四文銭もんせんは一人ごとを言っていばりました。

四

四文銭もんせんは十日ばかり、おばあさんの財布さいふの中にいたが、ある日、旅たびすがたのおさむらいが入って来て、ところてんを食べた、そのおつりにわたされました。

おさむらいのかわ財布さいふの中には、ぴかぴかした小判こばんが七、八まいも、入っていました。

「これはこれは、だんな方のおそろいで。ごめん下さいまし、へい。」

四文銭もんせんは手をついておじぎをしました。

「だんな方は、江戸えどのお方さままでいらつしやいませしょう



ね。へへ、五年も美濃みのの方にごたいざいでいらつしやいましたか。それではお久方ひさかたぶり
で江戸えどへお帰りで、何よりでございますな。わっちめも、やはり江戸えどのものでございま
すよ。はい。」

しばらくたつと、外で、もしもしお武家ぶけさま、とよぶ声がしました。

「かえり馬で安くまけとくだ。つぎの宿まで乗っておくんなさい。」

さむらいは値ねをきいてその馬に乗りました。しやりんしやりんと馬のすずがなり出し
ました。

おさむらいは江戸えどでは神田かんだの五軒町けんちやうに宿をとっていました。財布さいふの中の小判こばんのだん
な方が一人くずされ、二人くずされして、だんだんに人数がへっていききました。

十二月に入ったある日、おさむらいは用足ようたしに出たとちゆうで、両替屋りやうがえやへ入りました。

「はい、それでは、これで十両じゅうりやう。どうぞおしらべ下さいまし。きようはまた、きつい
風でございますな。」と店の人が言います。はてな聞いたような声だなど四文銭もんせんは財布さいふの

中で耳をかしげました。おさむらいは財布から、四文銭とほかの小銭なぞを出して、
両替賃をはらいました。四文銭はたたみの上へおかれると、あたりを見まわして、お
やと言いました。それこそはもとの浪花屋の店ではありませんか。

「へえ、これはありがたい。そういえば弟の二文銭はどこにどうしているだろう。わた
しだけはふしぎにもとのところへ帰って来たけれど、弟は今どんな目に会っているだろ
う。」

四文銭は、自分の幸福をよろこぶにつけて弟のことをかわいそうに思いました。おさ
むらいが帰っていくと、主人は例のたばこくさい太った指で四文銭たちをかきよせて、
ちやりんと銭箱へなげこみました。

「あなた。いたいじゃないか。いきなり人のかたの上なんぞへとび下りて。」と一人の
小銭がぶつぶつ言いました。

「そんなことはおたがいつこだ。ぶつぶつ言うもんじゃない。おや、おまいは弟の二文

銭せんじゃないか。」

「あつ、兄さんでしたか。」と、二人は手をとり合つてよろこびました。四文銭もんせんは店を出てからのすべてのいきさつを話しました。

「兄さん、わたしだつてずいぶんひどい目にあいましたよ。永ながい間びんぼうぼうずの、しらみのわいたどうまきの中におしこまれていたり、むねあげのときにもちと一しよにまかれて、三日もどぶの中にしずんでいたり、それはそれはさんざんでしたよ。」

「ああ、ああ、もう外へ出るのはいやだ。なるべく下の方にもぐつていよう。わたしの体へびつたりくつついていなよ。もう、はなればなれにはなるまいよ。ね。」と四文銭もんせんはしみじみこう言いました。

ある日、主人は、たいくつまぎれに銭箱ぜにをかきまわしていました。

「おい、しつかり、つかまっていな。下へもぐりよ。」と四文銭もんせんは、おつりに出されでもするかと、びくびくして言いました。

どうまき…大事なものを入れて、腹にまきつける袋
むねあげ…家を建てるときの儀式

「おや、へえ。」と主人は、四文銭もんせんと二文銭もんせんがからみついているのを見つけてひろい上げました。

「おい、お千代ちよ、来てごらん。この四文銭もんせんと二文銭もんせんがさびついて、はなれないよ。これはえんぎがいい。これはお千代ちよに上げるから、ひもをとおして、だいじにこしに下げておいでよ。はい。」と、主人はお千代ちよちゃんにわたしました。お千代ちよちゃんは、にっこりして、お母さんへ見せにいきました。

